平成3年度 三翠化学会総会開催

6月2日(日) 母校新館校舎

会員の皆様にはお元気にご活躍のことと存じ上げます。日頃は会の運営のため御協力をいただき厚く御礼申し上げます。さて、平成三年度三翠化学会総会を左記のように開催させていただきますので、万障お繰り合わせのうえご参加いただきますようお願い申し上げます。

記

日時：平成3年6月2日(日)
10時30分より受付開始
11時～12時　総会
12時～14時30分　講演会および懇親会
場所：総会　生物資源学部新館校舎2階206号室（視聴覚教室）
懇親会　三翠会館
講演会：講師　生物資源学部教授　松浦　誠氏
演題「ハチは何故刺すか」
会費：4000円　以上

松浦誠教授の講演も

「ハチは何故刺すか」

当日は「大学祭」メインの日

講師の松浦誠教授はスズメバチを中心とする著名なハチの研究家であり、多数の著書があります。講演では、人間とハチとのかかわりあいについて非常に興味深いお話しが聞けるものと期待しております。

現在、農芸化学は従来の農学部の建物に入っており、新建物（新校舎には、水産系および土木・機械等が入っている）に入るのは、何年か先のことになりますが、ご案内かたがた総会会場として新校舎を利用することに致しました。

なお、総会当日は恒例の大学祭のメインの日に当たりますので、総会の出席を兼ねて、久しぶりに種々の催し物を見学されたりして大学祭を楽しまれますのもよろしいのではないでしょうか。多数の会員の参加をお待ち申し上げております。同封のハガキにて出欠のご返事を御願いします。

三翠化学会会長　渡辺和巳

なお、併せて三重県支部総会も開催いたしますので宜しく御願い致します。

三翠化学

（題字は稲川先生）

第34号
平成3年4月30日発行
三翠化学会
津市上浜町1515
三重大学農芸化学コース内
電話／津〈0592〉32－1211
振替／名古屋9－59345
印刷／株式会社あるむ
TEL(052)332-0861 大8 長谷川正一

今春卒業する学生の就職・進学状況

今春は大学院生十四名、学部学生三十六名が修了および卒業します。大学院生は全員男性で、学部学生は女性が十二名です。今年も求人が多くて、非常に広い門であり、院生はほぼ希望通りとなり、女子は求人に応じられない場合もありました。

進学も多く、三重大学院に十三名、名大大学院に三名進みます。

この機会に、卒業生の活躍できる場を広げていきたいと思っておりますので、御協力をお願いします。

（コース主任　嶋田　協）

大学院修士課程修了者

石川　健一　愛知県食品工業試験場
井上　尊穂　和光純薬工業株式会社
伊場田　泉　鐘淵化学工業株式会社
井村　太　興和株式会社
大河内　浩　三井東圧株式会社
小村　大輔　太陽化学株式会社
小嶋　裕三　天野製薬株式会社
近藤　圭一　太陽化学株式会社
今野　隆道　森永乳業株式会社
清水　恵介　財団法人日本食品分析センター（名古屋支社）
西村　篤寿　イチビキ株式会社
林　栄一　味の素株式会社（中央研究所）
森村　直人　教員（三重県）
山中　直人　ファイザー製薬株式会社
近藤　直也　日本デコラックス株式会社
佐野　裕子　名古屋大学大学院
嶋田　繁　ファイザー製薬株式会社
島田　裕三　三重大学大学院
新濱　史子　多木化学株式会社
杉山　幸輝　名古屋大学大学院
鈴木　千絵　財団法人日本食品分析センター（名古屋支社）
高橋　真美　宝酒造株式会社（楠工場）
武井　英代　ミツカン株式会社
道木　健二　カゴメ株式会社
中野　智美　三菱油化株式会社（四日市事業所　総研）
中村　浩史　三重大学大学院
早野元日子　明治乳業株式会社
前川　睦敏　三重県庁
前田　真希　小林製薬株式会社
前野　勝美　大日本製薬株式会社
松林　幸誠　三重大学大学院
森岡　憲正　三重大学大学院
山岸なおみ　名古屋大学大学院
山田　義浩　三重大学大学院
矢野　元也　マルサンアイ株式会社
吉田　知世　メイテック株式会社
渡辺　英之　日興証券株式会社

農芸化学科卒業生

新　真奈美　株式会社シュウエムラ化粧品
磯部　正樹　三重大学大学院
井上　典之　三重大学大学院
大口　正晃　三重大学大学院
小木曾直人　三重大学大学院
加藤　毅　三重大学大学院
川端　裕之　伊藤ハム株式会社（中部事業所）
木村　徳男　三重大学大学院
小澤　勝彦　名糖産業株式会社
小島めぐみ　三菱油化株式会社（四日市事業所　総研）
小林　裕彦　三重大学大学院
小松美佐世　敷島紡績株式会社
近藤　樹　三重大学大学院

クラス会だより

早や40年か……

―志摩半島で専二クラス会―

昭和二十二年四月、敗戦に打ちひしがれた焦土の中で、私たち専二回生四十四人が入学しました。

陸士・海兵・陸幼など軍の学校からの復員者も多く、しかも地元勢が六割を占めていた。

昭和二十五年春、卒業したときは朝鮮動乱の最中で、就職もままならず、不況の時代だった。

その第二回生も、早や卒後四十年を迎え、還暦もすぎて、退職し、第二の職場なり悠々自適なりの生活を送っているものが多い。

ところで、九十年十二月一、二日、佐々木敏雄君の短歌のえにし深い二見館（伊勢志摩の二見浦海岸）で四十周年記念のクラス会を行った。

参加者は十七人だったが、六十すぎの初老組が夜のふけるのを忘れて飲み明かし、さらに夜のまちに繰り出して、二次会を楽しんだ。

翌朝、驚いた。昨夜のバーで、一緒に騒いでいたオバサン・グループと意気投合し、今日は車に分乗して志摩半島めぐりと伊勢神宮参拝の約束をしていたというのだ。

嬉しいことか、恥ずかしいことか、オバサン連中を乗せてのドライブ旅行は、恥ずかしくて人には言えない。内宮でお神楽奉納、玉垣内参拝のあと、名物の手こねずしを食べて解散した。

なお、佐々木敏雄君が、歌集〝横山〟を自費出版されたので、有志あい諮り、お祝いをお贈りした。

（専二・中川潔彦　記）

『きき酒大会奮闘記』

農芸化学科四年
応用微生物研究室
近藤　樹

三重県きき酒大会にて準優勝成績をおさめた私は、同大会で優勝された当研究室の一年先輩である吉川和宏さんと共に本年三月五日の東京新宿で行われた全国きき酒大会に出場して参りましたので、その報告をお伝え致します。

会場の張りつめた空気をはだで感じとり、全国大会三重県代表であることを痛感した。辺りを見渡すと、全国からよりすぐられた、きき酒名人達の顔には、殺気さえ感じられた。なぜ、そんなに緊張したこわい顔をしているのか？　と、きき酒大会とは言っても、酒は酒、酒は楽しく笑いながら飲むものではないのか？　と、疑問をもつ程であった。

開会セレモニーの後、いよいよ大会は始まり、第一グループの選手達がきき酒室へ入っていった。私と吉川さんは第二グループであったために、選手控え室で待機した。百余名といった多人数の選手のため、三つのグループに分けられきき酒大会は、順番に行われたのだ。待つこと三十分、ついに第二グループ私達のきき酒の番が回ってきた。

ここで、今大会のルールを説明しよう。まず第一コーナーで、吟醸酒、本醸造、原酒、純米酒、辛口、甘口の六種の新酒をききき酒する。この第一コーナーで、AからFの記号のついた各々の酒を自分なりに記憶する。そして、第二コーナーにうつり「イロハニホヘ」と印された六種の酒をきき酒し、AからFのものとつなぎ合わせるといった至って簡単なものなのである。各コーナーのきき酒制限時間は、七分。時間との戦いでもある。直感が一つのきき酒のポイントなのだ。

開始の合図とともに、選手達は一斉にきき酒をし始めた。自分以外の選手は皆、酒を口に含んでは、はき出している。それが、本当のきき酒の方法とは知っていたが、私はそのような方法では酒を見分けることができない。他の選手をしり目に、自分はマイペースで酒を一口二口三口といった具合に飲み、直感を大切にきき酒を行った。おいしい酒を味わいながら、楽しみながら。そんな自分の気楽なマイペースが幸いしたのか、数回のプレーオフ（同成績のものが順位を決定するため行うきき酒）の後、全国三位といった名誉を頂いたのでした。

自分は酒が大好きです。楽しく、味わいながら飲む酒が一番好きです。でも、今回、考えながら飲むといった、あまりおいしく感じない酒の飲み方も知ることができました。何であれ、一生懸命やり勝ちとった喜びは大きいという事もいっそう分かりました。これからの自分の歩む道に大きく役立つことと思います。このような機会を与えてくださった、嶋田協教授、三重県酒造協会の皆様方並びに関係者の方々には、大変感謝致しております。本当にありがとうございました。

近頃の話題

二週間ほどフランスに行ってきた。満開のソメイヨシノを後に、着いたパリはマロニエの花盛り。燭（しょく）台のような形をした白や紅色の花房が枝先に浮かび上がり、木全体が燃えているように見える。◇日本より高緯度にあるパリは春の到来が遅い。マロニエの花は春の訪れを告げる合図でもある。その燭台の明かりに導かれるようにボダイジュが新緑の葉を広げ、プラタナスやポプラが赤ん坊の手のひらのような可憐（かれん）な若葉をつけだした。◇フランス語で春はプランタン、最初の時という意味である。四季の最初の季節ということもあるが、フランスでは長いあいだ、一年は一月一日にはじまるのではなく、春からはじまった。新年が一月一日からになったのは一五六四年のことである。◇灰色の冬が去って青空がよみがえる春。最初の時にふさわしい。ことしの最初の時、パリは陽光がみなぎり、セーヌの河岸には半裸で日光浴を楽しむ人々の姿も見られた。街には各国語の会話が行きかい、湾岸戦争が終結してパリは再び国際観光都市に戻った。◇先週、寒波がやってきて陽春は一時中断した。南国イタリアでもときならぬ雪。早朝のパリの気温は氷点下一度。（『毎日新聞』一九九一・四・二六〝余録〟より転載）

待望の大学院博士課程設置が実現！

数年前から大学院博士課程に関する記事が「三翠化学」にもしばしば掲載されておりましたが、やっと平成三年四月から設置・発足が本決まりとなり、四月早々に学生募集、入学試験を行い、四月二十二日に入学式といったスケジュールが確定しました。設置に際し、関係者各位には格段のお世話とご協力を賜りましたことを大学の一員として厚くお礼申しあげます。

昭和六十二年十月に、当時の農学部と水産学部を改組統合して新しく生物資源学部を設立して以来、念願の博士課程の設置が実現しましたことはまさにご同慶の至りであります。新設の博士課程は、正式には三重大学大学院生物資源学研究科博士後期課程と称します。この名称が示しております様に正に自前の大学院であります。近年設置されました農水系のドクターコースの大部分は、総合大学院（一例・岡山大学大学院自然科学研究科…岡山大学の薬学部、理学部、工学部、農学部で構成）あるいは連合大学院（一例・東京農工大学院連合農学研究科…東京農工大学農学部・宇都宮大学農学部、茨城大学農学部で構成）に対しまして、本学の大学院は、文字通り三重大学生物資源学部のみが母体となったものであります。ドクターコースの設置に伴いまして、現在の修士課程は三重大学大学院生物資源学研究科博士前期課程と改称されます。

後期課程は表1のように、三専攻、六講座、十九教育研究分野から構成され、それぞれの教育研究分野には、教授二名、助教授一名、助手一名を配置して教育研究に当たるようになっております。入学定員は、各専攻四名計十二名でありますが、特色として、社会人・外国人留学生に対する特別選抜による入学の制度が設けられています。詳細は学生募集要項をご覧ください。なお参考のため、学部、博士前期課程、博士後期課程の関連表をあげておきます。これでお判りかと思いますが、農芸化学関係の多くが生物機能応用科学専攻に、一部が生物圏保全科学専攻に所属することとなります。

自然の開発、自然の保全、自然の利用を三本柱とする本研究科では、特定の専門分野における学問的な錬磨とともに、幅広い総合科学に立脚した洞察力・総合力を涵養するため、課題研究、特別演習、専門の講義以外に、特別調査研究、特別実験ならびに特別講義（植物分子・細胞生物学、海洋生態学、生態系循環論、熱帯植物資源生態学、地球環境論等）を必修～選択必修として履修する様にしております。その概要を表2に示しました。

後期課程に三年以上在学し、十四単位以上を修得した上、博士論文の審査および最終試験に合格した者には「学術博士」の学位が授与されます。勿論、論文提出による「学術博士」の途もひらかれております。

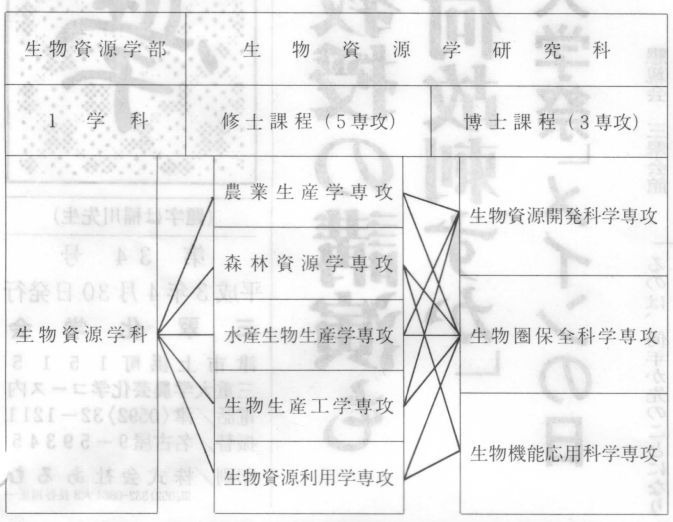
博士課程の設置、新校舎第一期工事の完了、分析機器の整備等と教育研究の条件は、一昔前にくらべて大いに整備されました。問題は中味を如何にもっていくかであります。内外における学会活動の強化・充実、あるいは教官・学生相互の切磋琢磨、相互啓発を通して、教育・研究の活性化をはかり、学問水準の飛躍的発展を期すべく、関係者一同、一生懸命頑張る所存であります。

三翠化学会の会員各位におかれましては、あらゆる角度、視点から忌憚なきご意見、ご助言を賜ります様お願い申しあげます。（嶋林・高橋）

〔表1〕

（専攻） 3	（講座） 6	（教育研究分野） 19
生物資源学研究科（博士課程）／生物資源開発科学	生物機能制御学	細胞情報工学、機能制御生理学、生態機能制御学
	資源生物育成学	陸圏生物生産学、水圏資源増殖学、生物生産システム工学
生物圏保全科学	生物資源管理学	生物資源経済社会学、緑資源育成管理学、海洋生態管理学、海洋資源情報学
	生物環境保全工学	生態系環境学、地域資源保全学、地域資源利用学
生物機能応用科学	生物機能開発学	生理活性機構学、生理機能解析学、微生物機能応用学
	素材機能利用学	高分子機能応用学、植物素材修飾学、素材解析利用学

〔関連表〕



〔表2〕

生物資源学研究科（博士課程）履習基準

区分		摘要	単位数
課題研究		複数教官による研究指導	必須
特別演習		研究課題に直接関わる分野のゼミナール形式の演習	4単位（必修）
特別実験		附属施設などにおける実験	1単位（選択）
専門の講義	Ⅰ類	学生が所属する講座の授業科目	2～4単位（選択必修）
	Ⅱ類	学生が所属する専攻内の他講座又は他専攻の授業科目	2～4単位（選択必修）
特別講義		広領域ないしは学際領域の授業科目	2～4単位（選択必修）
特別調査研究		附属施設などを利用する学際領域の調査研究	1単位（必修）
計			14単位

還暦記念…夫人同伴クラス会

大学一期生、徳島に集う

昨年十月十三・四の土・日を利用して、還暦記念同窓会が幹事役・高橋一郎氏の地元、徳島市の紅葉の名所・眉山を眼前に仰ぐ眉山会館で全参加者期待の中に挙行されました。今回は過去に例のない、夫婦同伴を前面に銘打って、これ迄の苦労を一緒に背負って歩んで来てくれた奥様方にも、記念すべき日に共に祝い慰め合って貰うというのが趣旨で、果たして何組の応募があるか、最初は不安も感じられる出足だったのですが、日を追って増え結局七組に達しました。一般産業界・官公庁・自営等、還暦といっても現在尚、陣頭指揮を奮っている者ばかりで、全く第一線を退き、息子に世話になりつつ、毎日が日曜日の年金生活を送っているのは脳梗塞で倒れた拙者一名だけという、年齢だけが徒らに暴走している感が非常に強い且つ事実、元気の良い熟年者集会だったと思います。男子十四名、夫人七名の計二十一名は、大一総員二十七名であったことを考慮すると全員で参加した様な賑やかで若々しい、和気藹々の雰囲気が終始漂い、世に言われる二八組の気概とも思える活気ある会話が、会場に充満しておりました。夕刻六時、幹事の歓迎の弁に始まり、福田会長の挨拶、吉田教授の開会宣言、岡本氏の乾杯音頭で気勢を挙げた後、各人の現況報告が順次自己紹介され、夫々の熟年に入ってからのポリシーを興味深く拝聴しましたが、共通しているのは、仕事の有無にかかわらず今後を楽しく・太く・生きて行く決意を強固に抱いているのに強い共感を覚えました。一様に退職後の身の処し方に就いては外見は気侭に見える年金生活だけでは、老人惚けは必至だと極めつけ、青壮年時代の肉体の存在を自覚する以上、仕事を継続して老いの枠組みに仲間入りするのを無理にでも拒否している様な面も一部感じられるのですが全体としては無視出来る程のものでした。筆者の様に完全に職業から解放された者でないと判らない楽園がある事に早く皆気付いてくれれば良いがなあと一面では祈っております。扨て宴会は徳島ならではの珍しい蕎麦米（そばごめ）の粥をヘルシー食として賞味し、スダチの芳香を充分漂わせた種々の料理に舌鼓をうち、アルコール度も程良く達した時、突如、鐘と笛のけたたましい鳴物に合わせて本場阿波踊りの名手達が、男・女・子供夫々に列を成して入場して来ました。蜂須賀家の居城として落成を祝った時領内の民衆が喜びを踊りに表現して城内へ練り込んだと謂れがある通り、座敷の目の前で踊りの妙技を暫時、固唾を飲んで観賞させて貰いました。恐らく当地の高橋幹事以外には此の本物に出会ったと言う者はなかったと思います。賑やかな宴会も十時過ぎ幕を閉じ、有志達で市内のカラオケバーに二次会を設け、部屋に帰って就寝したのは、二時過ぎになってしまいました。翌朝は昨夜の興奮の余韻を引き継ぎ、談笑しながら朝食をとり記念撮影を済ませ直ぐマイクロバスとタクシーに分乗、鳴門観潮・土柱観賞・茶屋〝お花はん〟・西国札所等を見学して四時間に亘るドライブを終え、今後の健闘を激励し合い且つ再会を約し、午後二時頃、徳島を後にしました。退職即離婚の多い世相を横目に見ながら、夫婦同伴クラス会を開催した意義を噛みしめながら、改めて二人三脚で苦難の時代を乗り切った満足感と本当の意味での自由な生活を今後如何にして満喫して行くのか、種々想像しつつ、仲睦まじく友情溢れる記念クラス会を終了致しました。末筆ながら徳島の高橋御夫妻の数々の御配慮、深く御礼申し上げます。（大1・杉岡俊幸記）

リレー随想 ザ・定年

「定年」それは「燃え尽きる日」

専1　岩田　章

年賀状で、長瀬和雄君から投稿の催促を受け、ようやくにして筆を取る事になった。

六十才での定年を迎えて、はや四年間が経過し、その時の感激を思い起こすのに、いささかの時間を要した為である。

戦時中、国に命を捧げんと、職業軍人（海軍経理学校）をめざした私にとって、戦後は第二の人生であった。

終戦直後は、屯田兵と自負し農業を始めたが、間もなく進学が許される事になった。

農業での生計を立てながら、時代の要請に応えられるものとして、選んだのが三重農専・農産製造科であり、昭和二十一年春入学した。

その後三年間恩師（既に故人となられた先生方、或いは定年を迎えられた諸先生）の薫陶を受け、昭和二十四年三月、卒業と同時に農業をやめ味の素㈱に入社した。

最初は、主力工場であり、戦災の焼け跡からの復興が始まっていた川崎工場に配属され、生産の第一線での戦いが始まった。

川崎工場二十一年間の時代は、復興・増産・技術革新・合理化と息つく暇もなく、寝食ままならずの戦闘状態が多かった。

昭和四十五年、千葉の東洋製油㈱に出向したが、この徹底して合理化された食用油の臨海大型工場での十二年間（単身赴任）は、きびしくなった環境問題への取り組みと、石油ショックに端を発した省エネルギーの時代であった。

又この工場は、大量の溶剤を使用する危険物工場のため、自衛消防隊を組織し、隊長（工場長の役割）として、きびしい訓練を実施したので、規律と一体感の強い職場が出来上がった事は懐かしい思い出の一つである。

五十五才にして、生産現場を離れ、千葉・オーシャン・ターミナル㈱の社長を経験したり、東京の自宅に戻り、味の素㈱本社・味の素サービス㈱と技術屋としては少々異色の分野も経験し、還暦・定年を迎えた次第である。

終戦から四十一年、絶望の淵から立ち上がり、三翠化学で学び直した後、味の素㈱という一企業を通じて、情熱を燃やし尽くし、その結果が国の復興・繁栄に寄与し得たという満足感をしみじみ味わった。

「青年は熱であり、意気であり、而して省みる時の微笑である。」という言葉を思い出す。

そして今は、第二の人生に思い残す事なしという心境で、ピリオドを打ち、第三の人生に入った。

さて第三の人生は、「余生」であり、神から与えられた御褒美を大切にしたいと考えて、趣味（囲碁）に生きている。

味の素㈱の子会社、或いは孫会社所属で、食品工場関連のコンサルタントとして、若干のお手伝いをしているが、あくまでも社会への御恩返しと思っている。

定年という制度を、私は誠に結構なものだと考えている。

定められた時間内にやり度い事をやり終えろと言われている様に思う。

定年までに、持てる力を惜しむ事なく出し尽くし、燃え尽きる事であろう。

（バトンは岡敏郎さんへ）